

報告

コミュニケーション教育をベースとしたプロフェッショナリズム教育

The Professionalism education based on the communication education

木尾哲朗¹⁾、永松 浩¹⁾、鬼塚千絵¹⁾、大住伴子²⁾、田中 宗¹⁾、森川和政³⁾、西原達次⁴⁾

Tetsuro Konoo¹⁾, Hiroshi Nagamatsu¹⁾, Chie Onizuka¹⁾, Tomoko Ohsumi²⁾, Hajime Tanaka¹⁾,
Kazumasa Morikawa³⁾ and Tatsuji Nishihara⁴⁾

九州歯科大学歯学部 総合診療学分野¹⁾ 口腔応用薬理学分野²⁾
口腔機能発達学分野³⁾ 感染分子生物学分野⁴⁾

1) Division of Comprehensive Dentistry, 2) Applied Pharmacology, 3) Developmental
Stomatognathic Function Science and 4) Infections and Molecular Biology,
School of Dentistry, Kyushu Dental University,

医療コミュニケーション教育は歯科医学教育のグローバルスタンダードとなっているが、日本における歴史は浅く、国内の多くの歯科大学・歯学部では 2006 年に正式実施となった共用試験 OSCE に伴って導入されたと言っても過言ではない。それゆえ、歯科医学教育において医療コミュニケーション教育が正式な講義科目として位置づけられ、学生が単なる概念論にとどまることなくロールプレイや模擬患者とのセッションにより実学としてのコミュニケーションを学べるようになったことは画期的だと言える。しかしながら、医療コミュニケーション教育と同様に欧米の歯科医学教育では確立されているにもかかわらず、国内では講義科目としていまだ十分に確立されていない領域に、プロフェッショナリズム教育がある。今回、医療コミュニケーション教育とプロフェッショナリズム教育との関係性について紐解き、九州歯科大学で我々が行ってきたプロフェッショナリズム教育ならびに日本歯科医学教育学会の倫理・プロフェッショナリズム教育委員会が行ってきた活動について報告する。

1. コミュニケーション教育とプロフェッショナリズム教育の関係性

コミュニケーションスキルとプロフェッショナリズムは、それぞれ欧州や米国の歯科学生が歯科医師になるまでに身につけておくメジャーコンピテンスのひとつとしてあげられている^{1), 2), 3)}。また、英国の医学教育者 Harden らは医師に求められるコンピテンスを三重の同心円からなる Three-Circle Model で表した。これは中央の円がタスクの遂行能力、その外側の円がタスクの捉え方、一番外側の円はプロフェッショナリズムを表す。医療コミュニケーションは 2 番目の円 (Approach to tasks) に属し、プロフェッショナリズムは前述のように一番外側の円 (As a professional) に属している。このようにコンピテンスという観点からみると、両者は異なっている。しかしながら、認知領域、情意領域、精神運動領域という Bloom⁴⁾ の唱える教育目標のタクソノミーでは、コミュニケーションもプロフェッショナリズムも認知・精神運動領域に属する点もありながら、コミュニケーションには「共感」、プロフェッショナリズムには「態度」があることから、両者の一部は情意領域に属するというような関連性がある。情意領域を身につける過程は、(受容)→(反応)→(価値付け)→(組織化)→(個性化)という段階を経るが、この情意領域の教

育には内面をその表出した部分から捉えることしかできないため、一筋縄ではいかないという難しさがある。

2. 九州歯科大学に於ける螺旋型プロフェッショナルリズム教育

大西ら⁵⁾は「振り返りによる学習」が効果的な教育法の一つであると報告している。我々はコミュニケーションの教育手法(Significant Event Analysis、シナリオベース、ファシリテーション、Reflection、患者の物語としてのナラティブベース)を礎として、1年次生から臨床研修歯科医に至るまで、正課内外における繰り返してレベルを上げていく螺旋型プロフェッショナルリズム教育を実施している。そのコアとなるのは、1年次と4年次学生の合宿、医療コミュニケーション科目(I~III)、歯科医療人育成学科目(I~III)、登院式、臨床研修医の合宿である。また、情意領域の教育を理解・実践することを目的に、2011年より毎年プロフェッショナルリズム教育のシンポジウムとワークショップを主催している。これには学内および学外の教員のみならず学生の自発的参加もあり、本学のプロフェッショナルリズム教育の実践に寄与している。

3. 良き歯科医師になるための20の質問と倫理事例集

著者が所属する日本歯科医学教育学会倫理・プロフェッショナルリズム委員会は「良き歯科医師になるための20の質問、倫理的検討事例集(2013年度版)」⁶⁾を作成した。「20の質問」は、2011年に開催された「臨床の場でよき歯科医師として実際に態度で示し、行動できる歯科医師を育てるためのワークショップ」の暫定プロダクトの成果を整理したもので、どの学年の学生にもわかりやすい言葉で学生が自身の言動を振り返る機会を得られるようにしている。また、倫理的検討事例集は歯科医療関連の問題解決における倫理的論証の手引き書であるデンタル・エシックス⁷⁾とは異なり、日本の国内事情に即した内容とし、14名の執筆者による42事例を収載している。前半の23事例では議論点を示して検討するためのいわばヒントを比較的詳細に示し、後半の19事例では構造的振り返りの援助を示している。また、臨床場面のみならず、日常の学生生活に関わる事例を多く掲載している。今後、各歯科大学でのプロフェッショナルリズム教育の手引き書として活用した際のフィードバックをもらい、教育の物的資源としての利用価値を高めていく必要がある。

このようにコミュニケーション教育の手法や評価は、プロフェッショナルリズム教育を実践する上で活用できる点が多々存在する。今後、コミュニケーション教育の活用と展開についての情報交換を行い、歯科医療人の育成へ貢献したい。

[参考文献]

- 1) 木尾哲朗、俣木志朗、藤崎和彦、大西弘高、小川哲次、鬼塚千絵、西原達次: 歯学士教育課程におけるプロフェッショナルリズム教育の構築. 日本歯科医学教育学会雑誌 29(1), 63-73. 2013.
- 2) 木尾哲朗: 歯科から見たプロフェッショナルリズム教育. 「プロフェッショナルリズムをどう育むか」日本歯科医学教育学会雑誌. 28(3) 140-141. 2012.
- 3) 木尾哲朗: 学士課程における Professionalism, コミュニケーションの教育. 「高等教育のグローバル化への潮流と我が国の歯学士課程教育とのハーモニゼーション(調和)に向けて」. 日本歯科医学教育学会雑誌. 26(1) 10-11. 2010.
- 4) Bloom BSほか著、梶田叡一ほか訳. 教育評価法ハンドブッカー教育学習の形成的評価と総括的評価一. 第一法規出版. 2000.

- 5) 大西弘高, 錦織宏, 藤沼康樹, 本村和久. Significant Event Analysis: 医師のプロフェッショナルリズム教育の一手法. 家庭医療;14(1): 4-11. 2008.
- 6) 日本歯科医学教育学会 倫理・プロフェッショナルリズム教育委員会編. よき歯科医師になるための20の質問 倫理的検討事例集(2013年度版).あさひ高速印刷.大阪.2013.
- 7) Rule JT and Veatch RM 著. 柳澤有吾訳. デンタル・エシックス-歯科の倫理問題-.クインテッセンス出版. 東京. 2001.